

作家 志茂田景樹さん

奇抜なファッションや多作で知られる作家の志茂田景樹さん(78)は近年、執筆量を抑え、子供たちへの童話の読み聞かせを中心に活動中です。短文投稿サイト「ツイッター」で人生相談に応じ、人生の先輩としての酸いも甘いもかみ分けた回答は、若い世代から絶大な支持を得ています。(磨井慎吾)



著作は60冊以上
歴史小説、推理小説、時代小説、戦争シミュレーション

直木賞受賞から一夜明け、取材に応じる志茂田景樹さん。昭和55年7月18日



「奇抜なファッションのきっかけは？」
「平成に変わるぐらいの時期に周りの女性の影響でどんなファッションが中性化していったんですね。常識や慣習からの解放感があり、束縛から自由になる快感がありました」
——膨大な著作で、特に愛着があるのは？

「直木賞受賞作の『黄色い牙』は、当時がんで闘病中だった父が元気だったころに手紙をくれた北海道出張中の話が構想の出発点で、主人公のマタギを父と重

ね合わせた部分もあって、思い入れがありますね」

——最近では？

「平成20年に刊行した明治初年の米国への留学生を描いた『蒼翼の獅子たち』。あと、キワモノですが長嶋茂雄監督率いる(平成7年の刊行当時の)読売巨人軍が自衛隊の体験入隊中に戦国時代にタイムスリップする『戦国の長嶋巨人軍』。インターネットで『トンデモ本』の金字塔として扱われるなど、思わぬ反響があったようです。これは今、漫画化が進行しています」

転機。

話そう、話しましょう

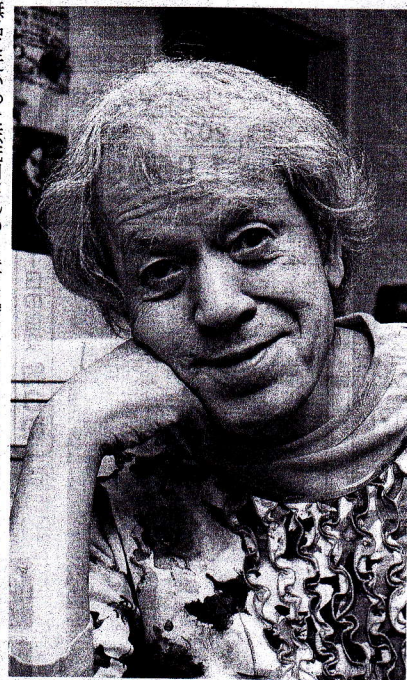
⑧

最初の出発点は、昭和55年。時代の流れにあらがって生きた東北のマタギを描いた小説『黄色い牙』で、直木賞を受賞した時だった。中堅のエンターテインメント系作家に対する文壇の「太鼓判」ともいえる同賞を受賞すると、各出版社から執筆依頼が殺到する。その後も今も変わらない。

「カゲキ」衣装で出演

最初の転機は、昭和55年。時代の流れにあらがって生きた東北のマタギを描いた小説『黄色い牙』で、直木賞を受賞した時だった。中堅のエンターテインメント系作家に対する文壇の「太鼓判」ともいえる同賞を受賞すると、各出版社から執筆依頼が殺到する。その後も今も変わらない。

子供からも学べる



「今の若い人は、いったん受け止めてあげないとだめでしょうね」と人生相談について話す志茂田景樹さん (野村成次撮影)

無名に近かった志茂田さんの生活は一変した。

収入も増え、編集者らと毎晩飲み出かける日々。そのうち、妻が待てないまま帰らなくなった。若い頃はモデルを務めたこともあったという約180センチの長身と、彫りの深い顔立ち。女性に、とにかくも

「昔から酒は好きだったが、受賞後は輪をかけてあちこち飲み歩いた。いろいろな女性と交際し、そのうちの一人とは同棲するようになった。そんな時期が、何年も続いた」
多くは語らないが、そのころの生活は、まさに「火宅の人」だったという。

平成に入るところから、テレビのパラエティ番組にレギュラー出演するようになった。自ら「カゲキファッション」と呼ぶ、極彩色に染めた頭髪に女物の派手な服をまとった、下半身はタイツという姿は、視聴者の度肝を抜いた。人気タレントとして、多くの番組に出すばかりの日々が続いた。

作家として一番の量産期も、この時代だった。「どうやっても時間が足りなくて、テープに吹き込んだものを文

章に起こしてもらった生活だった」。400枚の長編小説なら、2日で書きあがったという。だがそのうち、口述筆記が苦痛になってきた。

「長い間小説を書いているので、構成や登場人物ができれば長編の展開は頭の中に浮かぶ。でもそれは慣れとテクニックによるもの。吹き込んだりするのは僕自身、何となくステ

レオタイプ画的な感じがして、何の感動もなかった」と。そんな生活を切り上げて、自らが書きたいものを書くための出版社をつくったのが平成8年。子供への読み聞かせ活動をはじめたのは、そのころだった。「福岡市の書店にサイン会に出かけたとき、子供たちがいつになく大勢いた。読み聞かせをやりたいたいと突き

動かされるような感情にかられて、書店の人に絵本を数冊持ってきてもらった。読み手と聞き手が、物語の世界への没入を通じて一体になる読み聞かせ活動の魅力を、そこで知ったという。

23万人のフォロワー

2年ほど前からはツイッターでの人生相談に気さくに答え、今ではフォロワー(読者)が23万人を超える。主に若者から寄せられる悩みに対し、気負わず、真摯な回答を寄せている。その裏にある人生経験の思わぬ言葉も多い。

ツイッターでの人生相談の反響に、「若い頃からいろいろあったことも、役に立っているかもしれない」と話す。

「あと、読み聞かせ活動で得た感動も大きい。活動中に還暦を迎えたが、それを『新0歳』だと思えるようになった。新0歳だから小さな子供にも学ぶところがある、いくらでも新しいことが始まるんじゃないか、と」

古希を過ぎたとは思えないほどの、雰囲気は若々しい。人間の弱さをよく知り、人生の劇場をいくつも経てきた作家の言葉は、今日も多くの若い世代を励まし続けている。

直木賞受賞から量産期 読み聞かせ、人生相談へ